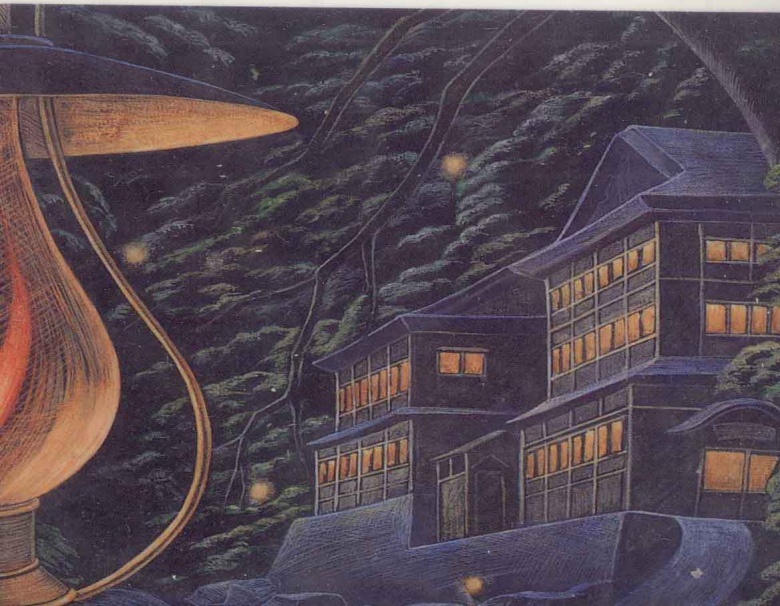
FEMINA NOVELS

ランプの秘湯殺人事件

長編本格推理

吉村達也



FEMINA

ランプの秘湯殺人事件
一九九四年八月九日　初版発行

著　者　吉村達也
編集長　中　正之
編集人　有働義彦
発行人　細川正博
発行所　株式会社　学習研究社
〒一一四五　東京都大田区上池台四―四〇―五
振替　東京八―一四二九三〇
電話　〇三―三七二六―八一一一（代表）
印刷所　株式会社廣済堂
製本所　安藤製本株式会社

©Tatsuya Yoshimura Printed in Japan
ISBN4-05-400388-5 C0393 165631

NOVELS

FEMINA NOVELS

ランプの秘湯殺人事件

吉村達也

目次

プロローグ——四カ月前　7
第一章　轢き殺された女　22
第二章　ランプの秘湯　62
第三章　死者が出た　114
第四章　ランプは語る　173
取材旅ノート　湯ノ倉温泉　216

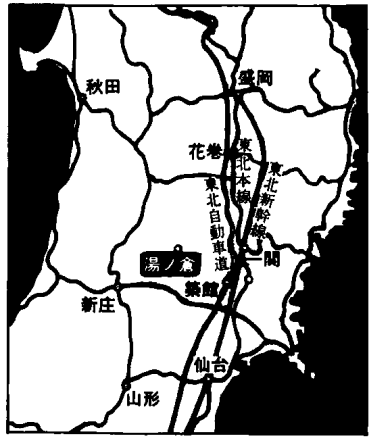
此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ブックデザイン　岡村元夫
カバーイラスト　藤田新策

ランプの秘湯殺人事件

湯ノ倉温泉周辺図

平泉町
栗駒山
虚空蔵山
湯ノ倉温泉
鍋石山
一関
東北自動車道
栗駒町
温湯
仙台藩御番所跡
栗原電鉄
東北新幹線
東北本線
迫川
細倉
座主
花山村
花山湖
一迫町
築館町
石越
栗駒高原
築館インター



プロローグ

——四カ月前

「吉永ちゃん……編集長」

デスクで仕事の電話をかけていた吉永悦史は、なれなれしい『ちゃん付け』で自分の名前を呼ぶ声を聞き、受話器をアゴと肩ではさんだまま、キャスター付きの椅子を回転させて、斜め後ろに立っている男をふり返った。

身長百九十センチ、体重百三十キロ、その巨体をハデなチェック柄の背広で包み、禿げ頭の上にサングラスをのせ、原色の幅広ネクタイに、手首にはゴールドのチェーン、毛むくじゃらの太い指にはカマボコ型の大きな指輪がぜんぶで四つ、というすさまじいセンス。

どこからみても悪役プロレスラーにしかみえないこの男は、芸能プロダクション『板垣組』の社長、板垣正吾だった。

「ああ、板垣さんじゃないですか」

相手の顔を認めると、吉永は受話器をふさいで短くつぶやいた。そして、目で応接コーナーのほうを指す。電話が終わったら、そっちへ行くという合図である。

板垣は片手をあげてそれに応じ、巨体を揺すりながらフロアの奥にある衝立の陰に回った。

だが巨体ゆえに、ソファに座っても、サングラスをのせた禿げ頭のてっぺんが衝立の上からのぞいている。

ここ『女性の友』社の実用書編集部のフロアで、

板垣のその姿は、まるで宇宙人のように異彩を放っていた。
「あの、編集長……」
電話を終えた吉永に、部下の瀬川杏子がささやく。
「サラ金に追われているんですか」
「バカ、れっきとしたプロダクションの社長だよ。板垣組の板垣社長」
「社長？『組長』の間違いじゃないんですか」
「そういうふうにからかわれるのを承知のうえで、わざと奇妙な名前をつけた――それが板垣組なんだ。奇妙でも珍妙でも、人に覚えてもらえば勝ち、という哲学があの人にはあるんだ。もちろん、自分の見てくれもちゃんと計算に入ってる。言葉を換えていえば、『目立つが勝ち』っていう思想だな」
そう言って、吉永は立ち上がった。
そして、背広のボタンをきちんと掛けながらつけ足した。
「杏子ちゃん、下の喫茶室に電話して、コーヒーと昆布茶をひとつずつ出前を」
「コブ茶ですか」
「うん」
「いつから編集長、そういう和風なものを飲むようになったんですか」
「飲むのは板垣社長のほうだよ。最近ダイエットに凝りはじめたそうだ」
「あの体で？」
「そう、涙ぐましいだろ。百三十キロの体重から四割減で八十キロまでもっていこうとしている。巨体が売り物の社長なのに、戦略間違ってるような気がするけどねえ」
肩をすくめると、吉永は、板垣が待ち受ける応接コーナーのほうへ向かった。

＊　＊　＊

「吉永さん、ユーは、いくつになったんだっけ」
吉永が向かいのソファに座るなり、板垣は独特のダミ声を出してたずねた。
相手を気安く『ユー』と呼ぶのも、板垣の専売特許である。ふつうならキザと眉をひそめられる言い回しだが、巨体に禿げ頭の板垣が言うと、妙に違和感がないから不思議だった。
「年ですか。先月で三十六になったところですよ」
「ふうん、三十六歳で実用書編集部の編集長か。そりゃ出世だねえ」
「前任の編集長が病気で長期療養となったものですからね。まあ、それで自動的に副編から昇格しただけのことですよ」
「そういう事情があったにしても、ユーの会社は、出す本だけじゃなくて、人事のほうもかなり保守的らしいから、三十代の編集長というのは珍しいんじゃないかね」
「そうですね。他社だったらゴロゴロいますけど、ウチの場合は、ほかに三十九歳の編集長が一人いるだけで……」
「あとはジジイとババアばかりか」
板垣はガハハと大声を立てて笑った。
「ちょっと社長」
吉永は、人差指を唇に当てた。
「声が大きいですよ」
「いいじゃないのよ、吉永ちゃん。おれの声がデカいのは生まれつきだし、それにほんとのこと言ってるんだから」
板垣はこういった調子で、いつも自分のペースに相手を巻き込んでしまう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「ともかくおれとしても、ユーとは、週刊誌の編集部で記者やってるときからのつきあいなんだから、やっぱりここは編集長昇進祝いをプレゼントしなくちゃ、と思ってね」
「昇進祝い？」
「いいネタがあるのよ、これが」
急に声をひそめると、板垣はプロダクションの名前が印刷された水色の封筒から、キャビネサイズの写真を三枚取り出した。
かなりどぎつい化粧をした女性が、一枚はワンピース、一枚はレオタード、そして一枚は水着姿で写っていた。
「誰ですか、これ」
渡された写真をしげしげと見つめながら、吉永は言った。
「誰だと思う？」
と、板垣が笑いながら聞き返す。
「知りませんよ」
「じゃ、感想は」
「場末のキャバレー勤めでもやっているような派手なメイクが気になりますけど、プロポーションは抜群ですよね。……でも、プロポーションは抜群ですけど、売れないホステスみたいな顔立ちが気になりますよね」
吉永の感想に、板垣正吾は、またガハハと大笑いした。
「さすがユーは、うまいよなあ。微妙な心の揺れ動きを言葉に表すのが」
「そりゃね、コメントに困るでしょう。褒めるに褒められないけど、けなすにもけなせない。だって彼女、社長のところからデビューさせるんでしょ」
「うん？　……うん、まあな」

微妙な含みを持たせて板垣がうなずいたところへ、コーヒーと昆布茶の出前が届いたので、一時会話は中断した。

そして、ウエイトレスが去ってから、また吉永が口を開いた。

「で、彼女、歌手ですか」

「いや」

昆布茶をズズズとすすった後、板垣は湯呑みから口を離して、首を左右に振った。

「じゃ、タレント？」

「そんなところだ」

「だけど、新人にしちゃ年をくってませんか」

「二十九歳。三十になるまで、あと三カ月よ」

「二十九……」

吉永は、ため息まじりに三枚の写真を交互に見直した。

「なるほどねえ、二十九歳ですか……それにしてもこのメイク、どうにかなりません？　あまりにも野暮ったいですよ」

「ああ、それね。それは変えないといかんわな。本人が自分でやってきたものだから」

板垣は苦笑した。

「素顔はけっこういけるのに、メイクしないと不安だったときの癖が抜けなくて、すぐ厚化粧になっちゃうんだ。おまけに、時代遅れの化粧法だから」

「で、どういうふうにデビューさせるんです。たしかにプロポーションは抜群だけれど、二十九という年だったら、いまさらモデルはないでしょう。なにか特技でもあるんですか。たとえばモノマネとか」

「じつをいうとな、彼女はもうデビュー済みなんだよ」

「ほんとですか。でも知らないなあ……。ま、女性

週刊誌の現場から離れて三年も経てば、昨今のタレント事情には疎くなりますけどね」
「吉永ちゃん、ユーは久世礼子ってタレント、覚えているかい」
「もちろんですよ。一時期テレビのホームドラマなんかに出ていた……あ、社長の事務所だったでしょ、たしか」
「そうだ」
「コロコロッとした愛くるしいタイプの女の子で、男よりも同性からの人気がすごかったけど、だんだん太ってきちゃって……いつのまにか消えてしまいましたよね」
「あれから十年だ」
ポツンとつぶやいた板垣に、吉永は「え?」という顔を向けた。
「あれから十年って……まさか、この写真……」
「礼子だよ」
頭にのせていたサングラスを本来の位置にストンと落とすと、板垣は言った。
「苦節十年、涙の減量四十キロってやつだ」
「うそ……」
とても信じられないという表情で、吉永は写真に視線を戻した。
「だって社長、ブラウン管から姿を消す直前は、彼女、女子プロレスにすら向かないっていうくらいに太っていましたよ」
「そのとおり。だから、十五でデビューしたときの可愛いアイドルというイメージは影も形もなく、しまいには、色モノみたいな役しかこなくなった。しかも端役でね。わずか四年で、立場も体型も激変っていうやつだ」
サングラスをかけた板垣は、編集部の天井を見上

げながらつづけた。
「それでも、本人がその気でいてくれたら、タレントとして生きる道はあったんだ。だけど彼女は、周りからのいじめに耐えられなかった。陰口、面と向かっての悪口、嘲り笑い……そういういじめにね。だが、それ以上に、失恋による精神的打撃が大きかった」
「歌手の相原純哉との一件ですか」
「いや、ユーの週刊誌にもずいぶん取材されたが、あの事件はたいしたことはなかった。それではなく、礼子がもう売れなくなって、あの子のスキャンダルでは記事にもならないといった時期に、彼女は真剣な恋をした。問題はその恋が破れたときだった」
板垣の表情が曇るのが、サングラスをかけていてもわかった。
「相手の男は、体重八十キロオーバーとなった礼子を、そんな見てくれの問題にとらわれずに愛してくれた。だから、礼子はその男との愛にすべてを捧げようという気になった。彼と出会うまでは、どんなに周囲からバカにされても、アイドルとして騒がれた過去の名声が忘れられずに、再起をめざして礼子は耐えに耐えていた。もちろん、生活のためもあった。笑われても笑われても、礼子は歯を食いしばってタレント活動をつづけてきた。……ところが、その男との出会いで、礼子の仕事観や人生観がガラリと変えられてしまったんだ」
「結婚をしようと思ったんですね」
「そのとおり」
たっぷりと肉のついたアゴを引くようにして、板垣はうなずいた。
「お嫁さんになって、一生その男に尽くす——これが、十九のときの礼子の決心だ」

板垣は、手のひらにのせた湯呑みをクルクル回しながらつづけた。
「ところが、その十九歳の乙女心を、男が見事に踏みにじってくれたんだよ」
「他の女に乗り換えたんですか」
「それもよりによって、太り出した礼子をふだんからいびり抜いていた女優とできちゃったんだ。若狭友香とね」
若狭友香は、いま三十なかばを過ぎているが、脂の乗り切った女優として、いまもっとも注目を集めている一人である。
「久世礼子を裏切ったその男は、業界の人間なんですか」
「芸能人ではない。カメラマンだ」
「カメラマン……」
「十年前のその頃は、ほとんど名前も売れておらず、週刊誌の仕事でモデルをつれて温泉めぐりの仕事をやったり、グルメ特集だといってはレストランの取材をやったり、そんな仕事しかこなかった奴なのに、マスクだけはよかったんだ。ちょっと日本人ばなれしていてな。ほら、草刈正雄っているだろ、俳優の」
「ええ」
「それとか、F1にいた鈴木亜久里な。さもなければJリーグの永島昭浩……そういった彫りの深い、ハーフ系の男だよ」
「それじゃモテますね」
「だろ。で、見てくれがいいもんだから、奴は売れっ子女優の友香に惚れられ、ご指名によって彼女の写真集の仕事をもらった。そうしたら、これがバカ売れだよ。それで、一躍名前が出てしまった。もちろん収入のほうもウナギ上りだ」
板垣は、金のブレスレットをじゃらつかせながら、

上昇する急カーブを描いてみせた。
「あれから十年経ったいま、奴は、友香とは結婚にも至らず別れてしまったけれど、おかげで業界では五本の指に入る売れっ子カメラマンだ」
「誰です。その『奴』っていうのは」
「露木だよ、露木修」
「ああ……」
吉永は、おもわず大きなしぐさでうなずいた。
露木修は、まさにいま旬のカメラマンだった。
数々のタレント写真集で大ヒットを出し、とりわけ最近たてつづけに発表したヘアヌード写真集によって、一般にも露木修の名前は広く知られるようになっていた。
「露木が、久世礼子の恋人だったんですか」
「最後の恋人、というべきかな」
苦々しい表情で、板垣が言った。
「あの男にふられて以来、礼子は精神的にもおかしくなってしまった。新たな恋なんてできる状態じゃなかった。『女の子はスタイルじゃない、とか言いながら、やっぱり太っている子はキライだったんじゃない』――そう言って、礼子は泣きじゃくりながら食うんだよ。バカなことはやめろと叱っても無駄だった。『こうなったら、とことん太ってやる。太って、太って、太りまくって死んでやる』ってね。さすがのおれにも手に負える状態じゃなかった」
「ひえ〜」
吉永は大げさに驚いてみせた。
「そんなふうになっていたんですか、彼女。知りませんでしたよ」
当時、女性週刊誌の若手記者だった吉永は、はじめて聞かされる裏話に、重いため息をついた。
「それでな、これではいくらなんでも芸能活動はも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton